参考②

第71回兵庫県広報コンクール　審査講評

【広報紙部門】

審査員：荒川　克明（神戸新聞社 編集局 メディアセンター紙面 編集部 第二部長）

真っ白な状態から目を通した昨年とは異なり、審査員として２回目の今年は各市町とも前年の紙面の記憶を下敷きに審査を進めました。昨年の講評でも触れましたが、作り手として大切なのは紙面の向こうにいる読者の姿を想像することだと思います。一方的に押し付けるだけの情報ではなく、手に取って役に立ててもらえるか、わが町の課題に目を向けるきっかけにしてもらえるか、ストレスなく読んでもらえるかーの３点を基準に選考しました。

市の部で、何度も読み返したのは洲本市、三木市、加西市、川西市の作品でした。いずれも「重い病や障害」「ゲーム依存対策」「聴覚障害」「獣被害」「まちのにぎわいづくり」と、特集の切り口が目を引きました。前年も上位を占めた自治体です。

洲本市は前年の「ひきこもり」に続いて、重たいテーマを取り上げました。今年も当事者の思いから、支える立場の人たちの声を立体的に紹介。「子のありのままを受け入れる難しさ」「否定と受け入れを繰り返し」など、決して平たんではない現実を包み隠さず文字にしたことに好感を持ちました。前年と同じようにサポートにまわる行政側を紙面の最下段にレイアウトする一貫性も好印象でした。丁寧な取材や紙面の見せ方など、ノウハウがしっかり蓄積されている印象です。

加西市の「獣被害」は全国でクマの被害が相次ぐ中、タイムリーなテーマでした。猟師の覚悟から、実際の狩猟現場、後継不足の課題に触れつつ町内一丸で取り組む集落を紹介するなどテンポよく展開。良質なドキュメントを見たような読後感でした。

これらの紙面に共通するのは、単に情報を伝えるだけではなく、読者も一緒になって考えられる構成になっている点です。

今後、県内各地で動きが広まる「部活動の地域連携」を取り上げた南あわじ市も大切なテーマと向き合っています。上記の自治体のようにデータや事象の紹介だけにとどまらず、例えば成り手不足が課題とされる地域クラブの指導者の声を紹介したり、合同部活動ならではの練習風景やチームワークの磨き方など、生徒の本音に迫ったりすれば、特集に厚みが出て、読者もより実感が持てるのではないでしょうか。加西市と同様に「獣被害」を取り上げた相生市も同じくです。そういった「もう一歩踏み込んで」と思わせる惜しい紙面がいくつかありました。

町の部では多可町と佐用町の紙面が目を引きました。取材先がどんどん繋がっていく多可町の作品は物語を読んでいるような不思議な感覚になりました。編集者の思いが押し付けにならない適度な距離感を保っており、前年に引き続いて広報紙の新たな方向性を感じました。

佐用町は外国人居住者の増加を通してまちの将来像を探りました。日本語学校がカギとなって流入が続き、地域の労働力となって空き家対策にもつながり、交流も生まれる様子は、そのまま近い将来の日本の縮図を見るようでした。地域の課題に正面から向き合う姿勢は、赤字ローカル線問題を取り上げた昨年の特集と通じるものがありました。

今回の審査ではコロナ禍がひと段落し、どの紙面からも日常が戻ってきたような空気を感じられたのが印象的でした。そして応募作の多くが特集面にチャレンジしていたように見受けました。企画から取材、執筆、編集と、毎月限られた時間で紙面を仕上げるのは大変だと思います。それでも、紙面の顔である１面の写真に魅かれてページをめくり、食い入るように読んでくれる読者の姿を想像すれば、苦労は吹き飛ぶはずです。これからも紙媒体に携わる者の醍醐味を味わいつつ、さまざまな紙面に挑戦してほしいと思います。

審査員：吉田　三千代（広報・編集アドバイザー）

今回の応募作で取り上げられたテーマを見ると、子育て関連（7 市町）、まちづくり・魅力発信（7 市）が最も多かった。次いで多かったのが、多様性の理解促進（4 市町）。3 番目に多かったのが、高齢者介護について（3 市）だった。

多様性を扱った特集は、聴覚障がい者支援（三木市）、ジェンダーギャップの解消（豊岡市）や性的マイノリティの受容（高砂市）を求める内容のほか、外国人増加で町が活性化というレポート（佐用町）もあり、今日的な社会の変容とわが町の実践を発信する意欲作揃いだった。

子育て関連では、3 市町（洲本市、多可町、神河町）が障がいや病気のある子どもと向き合うというテーマに挑戦した。いずれも繊細な配慮を要する難易度の高い取材の積み重ねによって実現したものであり、担当者の誠実なまなざしがあってこその力作だった。

市部門では、まず洲本市を推したい。エントリー票に「障がいや病気のある子とその家族は、決して『かわいそう』な存在ではない」と意識して紙面をつくったと、担当者は記していた。その姿勢は、読者にしっかり伝わっている。社会の受容力が高まるようにという祈りに満ちた特集だった。

次いで、小野市も高く評価したい。こちらは、担当者の子育て実感を動機として企画化された、ほがらかなメッセージにあふれた特集。「＃ここが笑顔になれる場所」だとする、小野市アピールが素直に届く。一緒に歩いていこうという頼もしいエールを受け取った市民が数多くいたと思う。

町部門では、佐用町の大特集に圧倒された。日本語学校をハブとした多様な外国人との共生・共創が町の発展に不可欠との思いが、丹念な取材によって立体的に迫ってくる。高齢化、人口減に悩む小規模自治体を照らす、この新たな光がゲームチェンジャーとなって、地域創生の理念や手法が更新されていくのだと確信させるほどであった。

子育てふれあいセンターがつなぐ人々に寄り添った多可町も、比類のない発信だった。広報紙という枠を超え、情緒を揺さぶってきた。読者から大きな反響を得たというのも頷ける。エントリー票には、「多可町にしか作れない広報、多可町らしさを忘れない広報を」とあった。その思いが真摯な特集として結実している。

近い将来、ＡＩ活用で情報欄などは、より効率的に作れるようになると予想するが、今回目にしたどの特集も、やはり人間の感情の機微がなければ成立しえない世界だと思えた。小さな違和感を感知し、さまざまな声がうねる先にその自治体ならではの希望を見つけるような特集づくりは、広報パーソンの熱意抜きには完遂しえないだろう。

最後に、兵庫県全体として、昨年よりもさらにレベルが向上していると目を見張ったことをお伝えしたい。限られた人員での担務は激しさを増していると想像するが、健康に留意されつつ、これからも素晴らしい広報発信を続けていただきたい。

審査員：有田　佳浩（兵庫県広報プロデューサー）

広報誌（紙）は「対話」だと、私は考えています。

告知でも啓蒙でもなく、ましてや「●●しませんか？」や「××だと思いませんか？」などの表面的な呼びかけでもない「対話」。そのためには、同じ目線に立つ「スタンス」と、さまざまな立場や意見に目を配る「視点」が必要です。今回のコンクールでは、特集企画にそんな「対話」につながる「視点」が多くみられたように思います。ひとつのテーマでも答えはひとつではなく、「視点」が多様であれば答えは複数存在する。そんな予定調和にならない覚悟（？）を持って、これからも特集企画に取り組んでいただければと思います。もちろん、特集に割けるページ数は市町によって異なります。それでも一部の市町では「対話」のために前年よりページ増で取り組まれていました。これからの時代、ますます重要になるだろう考え方だと私は思います。

そんな「対話につながる特集企画」が目立った今コンクールで、改めて考えさせられたのが「それぞれの市や町の規模・特性にあった編集（企画）」が必要だということです。都市部なら都市部なりの、農村部なら農村部なりの、人口構成や行政と住民の距離感、地域課題。どんなテーマにするかだけではなく、言葉遣いや書式まで意識する。明確な言語化は難しいですが、そんな「地域の空気」のようなものが表現されていたのが洲本市でした。テーマ、タイトル、（デザイン的な）余白の使い方。おそらくはスキルの問題ではなく、そもそもの広報紙に対する考え方のようなものが結実しているように思えました。

【広報写真部門】

審査員：藤家　武（神戸新聞社 編集局 映像写真部長）

今年の応募作品は、全体的に見て写真の内容と伝えたい狙いが一致しているものが多かったと感じました。広報紙は地域の魅力や課題などをわかりやすく伝える役割があるので、担当職員の方々の熱意に触れた気分です。

審査段階から目立つ存在は、シンプルな写真構成で訴えたいメッセージと一致している作品でした。デザイン性の高いものは広報紙の域を超えるようにも感じますが、そこはしっかりと「何を伝えるか」を打ち出していれば読み手の住民の方々に届いているはずです。

一枚写真の部で、伝わりやすさやインパクトで選ばれたのは多可町の作品です。アンケートも取り入れた丁寧な取材で学校給食の特集を組み、表紙に象徴する写真を選んでいます。一方、阿波踊りをテーマにした洲本市は、読者に解釈の幅を持たせる写真選びをしています。伝えたいメッセージとともにさまざまな考え方を受け入れる余白を残しています。

組み写真の部はコロナ禍が落ち着き再開された祭りをテーマにした作品が目立ちました。祭りは関わる人がさまざまで、見せ場も多いことから複数の写真で伝えるテーマとしては取り組みやすいと思います。しかし、「より多くの人々」「より多くの場面」と欲張ることでメリハリのない内容になりがちです。

広報紙の中に、いろんな人たちが登場することは好ましいことなのですが、どこかで線を引いて強弱のある写真選びとレイアウト作業が求められます。まさに「引き算」の感覚で、地域を思う職員の方にとっては大変な作業になります。今回は特選はありませんでしたが、数多い写真を採用しながら、くりぬいた人物写真を使ったり短い見出しで強弱を付けたりした佐用町の作品が光りました。

そのほかアメコミ風の凝ったデザインで攻めたり、地域の名所をインスタ風にして写真を配置したりするなど、伝える工夫が感じられる作品も少なくありませんでした。受け手の住民にいかに届けるのかの模索が作品からにじみ出ているようにも感じました。

審査員：桂　知秋（兵庫県メディアディレクター）

本年度は特に一枚写真部門において、イベントなどの様子を「伝える」という姿勢や視点だけでなく、地域の住民や文化を自分たちはどう感じているかを表現しようとする意図が明確な写真がより多くなったように感じました。おそらく、地域にとってそのイベントや文化がどういう存在なのか、住民はどう感じているのだろうか、どう対話しようか、と考えながら撮影されたのではないでしょうか。

洲本市の阿波踊りの特集ページの写真。観客が待ち受ける中へ踊り手たちが踊り込もうとしている後ろ姿。祭りの高揚感や賑やかな音が聞こえてきそうな写真でありながら、どこか余韻のある紙面に、洲本市での阿波踊りの存在や現状を想像させられました。踊りは踊り手だけのものではないし、担い手不足の課題も抱えている。そんなある種問題提起も含んだ視点が写真で表現されていて、市として住民と一緒に考えていく姿勢を感じました。

多可町の給食の写真。給食の取材で知った小学生に人気の「黄金パン」。それを表紙に、というところまではよくあると思いますが、表紙を飾ったのは必死に黄金パンに食らいつく生徒。表情やしぐさで給食の時間をいかに楽しみにしていたかがストレートに伝わってきます。きっと笑顔で食べる写真も撮影されたのだと思うのですが、それまでの取材での給食に関わる方々の並々ならぬ熱意を考え、この写真を選定されたのかなと想像しました。

一枚写真の部門では、他の写真も含めて、写真一枚でここまで読み手と対話できるんだなと私自身、大変刺激を受けました。それに比べると、全体的に「伝える」ことから抜け出せていないように感じたのが組み写真。今年度はお祭りやイベントの組み写真が多かったからかもしれませんが、どうしても記録写真になってしまいがちです。写真の大小やシーンのバリエーション、写真の寄り引きなどを巧みに構成して、全体として背景のストーリーを感じられる組み写真にもぜひチャレンジしていただきたいと思っています。

【映像部門】

審査員：小林　和樹（日本放送協会 神戸放送局 コンテンツセンター　センター長）

極めて難しい審査でした。それぞれの作品が全く異質でバラエティーに富んでいるため、以下の３つの基準で評価しました。

まずは「映像の魅力」。一つ一つの映像が持つ力です。インタビュー企画でも、同じ映像をできるだけ繰り返さないでほしい。カメラが限られても、聞く場所や背景、画角を変え、目元や手元のアップ、関係のない置物などの映像素材も別撮りしておくと変化を出せ、被取材者の心象風景をより表現できます。もう一段上の完成度が問われる風景などの映像は、素材がもつ魅力に迫れているか、見る人の想像を超えるのか、食べ物の匂いや風の感触といった五感を刺激できているのか・・。相生市の作品は、例えばカキのシーンでも、美味しく見える角度、湯気、見る人の目の輝きなど工夫を凝らし、撮影者の熱が伝わるカットが多いと感じました。

２点目の審査ポイントは「意図を達成しているか？」です。意図と演出を合わせて素材をより魅力的に見せることで作品の目的を達成したい。それぞれが良くても合致していないと全体としてはぼやけます。宝塚市の作品は、市ゆかりの芸術家を取り上げ、学術的な資料としても価値があると、審査員の評価の高い労作でした。ただ、宝塚と芸術家の関わりを描く、作品を紹介する、ユニークな芸術を生んだ主人公の考えに迫る・・・大作であるだけにシーンによって意図が分散しています。それならば、時には無音の映像だけで作品をじっくり見せる、時にはインタビューの声に写真をかぶせるだけにする・・、それぞれのシーンの意味を考え、それに合わせた演出で惹きつけ続け、長尺の作品を見せきって欲しかったです。同じく入選の赤穂市は、キャラクターが市内の不思議に迫るという演出が大変魅力的で、選ばれた〝不思議〟も興味深く、最初は引き込まれました。ただ中盤にキャラクターがいなくなってしまい、演出を徹底しなかったのが惜しい点です。

３点目は「見る人（ターゲット）を的確に設定して伝えているか」です。応募作品の多くは、通常はそれぞれの市町に住む人を対象に作られたと思います。一方、コンクール、特に全国を目指す作品は、不特定多数の人にも〝わかる〟〝共感できる〟ことが求められます。地域の人にはわかっても他の地域の人には、まったく理解できないことや、映像から抱く感情も異なる場合も多い。「地域的な基礎知識が全くない人に、それぞれの映像がどう見えるのか、どんな感情を抱くのか」を突き詰めて制作して欲しいです。

特選の小野市は、ホースから水が出る瞬間、消防車の出動、煙の中での活動・・・一つ一つのカットに迫力がありました。消防職員が自ら撮影したことが功を奏したと思います。さらに市内の魅力的な映像を効果的に挟み込み〝伝統ある街を守る小野市消防の仕事〟への誇りが自ずと伝わってきます。司令室や出動のシーンなど、音楽に合わせてカットを切り替えたことで、映像のリズムも秀逸で最後まで一気に見せきります。これを３分以上の作品にしようとしたら破綻したと思います。全体の長さをあらかじめ決めて、最良の映像を、遊びも含めてギリギリの短さで見せるという姿勢が作品としての完成度を上げました。驚いたことに、初心者が無料のソフトを使って制作したといいます。「(外部であっても)取材対象の内側に迫って撮影する」「意図を明確に持って、適正な長さ、リズムで編集する」という条件を満たせば、専門の機器がなくても、これほどの映像を制作できる可能性を示した点も評価しました。誰もが映像を発信できる時代です。市町の広報映像でも、様々なトライアルが増えて、これまでにない魅力的な映像が増えていくことを期待します。